

いっしきあおかい

一色青海遺跡(本発掘調査B)

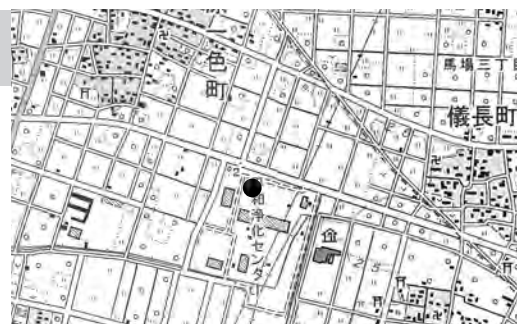
所在地 稲沢市一色青海町地内
(北緯35度14分11秒 東経136度45分18秒)

調査理由 日光川上流流域下水道事業

調査期間 令和3年5月～10月

調査面積 1,040㎡

担当者 堀木真美子・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「清洲」)

調査の経過 調査は愛知県建設局下水道課による日光川上流流域下水道事業水処理施設築造工事に伴う事前調査として、愛知県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地である。近代の耕作土、床土を除去した状態を1面目として、鎌倉時代～江戸時代までの遺構を検出し、1面目の遺構除去後に検出される弥生時代中期後半の遺構を2面目として扱っている。調査面積は1,040㎡である。

立地と環境 一色青海遺跡は三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道南岸の自然堤防上に位置する。遺跡周辺の現況は、水田や植木の栽培を目的とする耕作地として整備され、区画整理も進んでいるため、旧地形が窺える場所は無い。現況の遺跡周辺の標高は、わずかに北東から南西側に向って下る地形となっている。

地下水位は高く、標高0.5m以下では湧水が発生する。遺構検出面は、現代の水田耕作土の掘削深度にも影響されるが、標高0.2m～0.5m付近に位置し、遺構、地山ともに砂質の粘質土によって形成され、滞水によって容易に崩落するため、調査には常時排水設備が必須となる。

調査の概要 過去の調査結果から、一色青海遺跡では北西側を上流として、南東に流下する旧河道と旧河道内を再掘削されて設けられた大溝が2019年度調査区の西半部を通り、2009年度調査区内で東向きとなった後に北東に向きを転じ、2018年度調査区中央を北に抜ける状況が検出されている。今年度の調査区は2019年度調査区の西隣、2009年度調査区の北西側に位置することから、旧河道(400NR)と、大溝(200SD・600SD)は、2019年度調査区から連続し、当調査区の北西角付近から東へ抜け、当調査区の南西付近には、旧河道、大溝の南岸に位置する居住域がわずかにかかることが想定されていた。

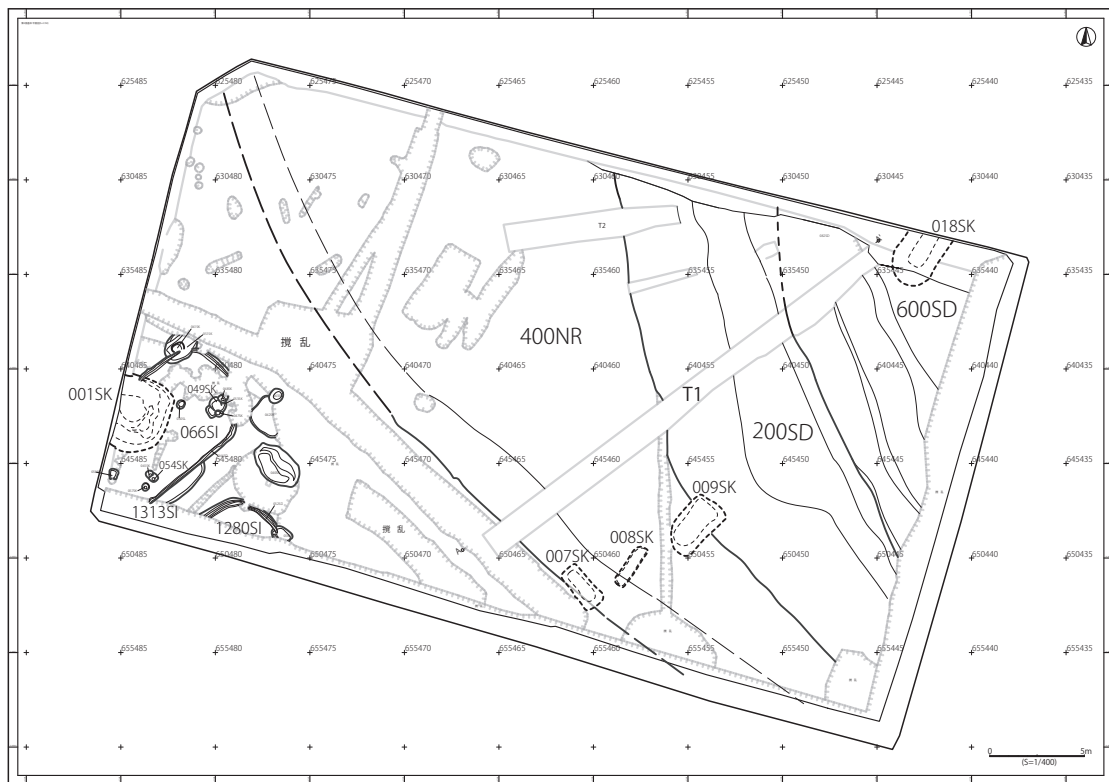
1面の遺構(中近世) 調査の結果、1面目では、過去の調査同様、鎌倉時代～近代の遺構が検出された。主な遺構は平面形が方形・楕円形の土坑、溝がある。平面形が方形の土坑(007SK・008SK・009SK)は、過去の調査でも多数検出され、埋土は粘質土がブロック状に混じる土、山茶碗などが検出されるという共通点がある。これらは鎌倉時代前後に掘削されたと考えられている。平面形が楕円でやや深い土坑(001SK・018SK)は、埋土が方形のものとは異なり、粘土か粘土に砂が混入した状態となっている。施釉陶器が検出されたことから、近世に掘削され、埋没したと考えられる。過去の調査でも検出されているが、検出される数は方形の土坑より少なく、用途として耕作地内の水溜めなどを推定している。溝(2面目遺構平面図では攪乱として表記)は現在の水田と方位が一致しないものは、周辺の耕作地が区画整理される以前のものと考えられ、時期は近現代を想定する。

2面の遺構(弥生時代中期) 弥生時代中期の遺構は、旧河道(400NR)、大溝(200SD・600SD)、竪穴建物跡(066SI・中期)

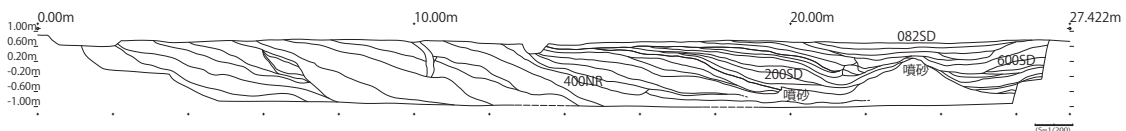
1280SI・1313SI)がある。旧河道と大溝は当初の想定よりも東寄りに検出され、上流部が当調査区のより北側から流下することが判明した。また、居住域が想定された調査区南西角部では、合計3棟の竪穴建物跡が検出された。内訳は、新たな竪穴建物跡1棟(066SI)、2009年度の調査区から連続する竪穴建物跡2棟(1280SI・1313SI)である。これら3棟の前後関係は検出状況より066SIが最新であり、1313SIが切られている。なお、2009年度の調査では、066SIの位置に想定された1660SIがもっとも古いと考えられたが、今回の検出結果は異なっているため、新たに別の遺構番号(066SI)を付した。

066SIは長辺8.5m以上、短辺5.7mを測る。特に遺構内の北半部には炭化物・炭化材が多く残存し、炭化材が一定の方向に揃う状況も見られるため、これらは066SIに用いられていた建築部材の一部と考えられる。066SIの柱穴は、東側の049SK、054SKが検出されたが、西側では明確な柱穴が検出できなかった。

ま と め 遺物は066SI内で土器がまとめて検出された。旧河道(400NR)、大溝(200SD・600SD)からも検出はされるものの、過去の調査に比べると量が少ない。これは一色青海遺跡の集落域中心部が当調査区よりも下流域にあるため、河道・大溝に廃棄、あるいは流れ込んだ遺物は下流に流れ、上流方向には少ないためと考えられる。(鈴木恵介)



2021年度調査遺構配置図(一部1・2面の遺構を合成)



T1土層断面(200SDと600SDの境界付近が噴砂で歪んでいる)



一色青海遺跡 遠景(西から)



調査区 全景(西から)



楕円形の土坑断面(018SK: 南西から)



竪穴建物跡(1280SI: 東から)



竪穴建物跡(右から066SI、1313SI、1280SI: 北上空から)



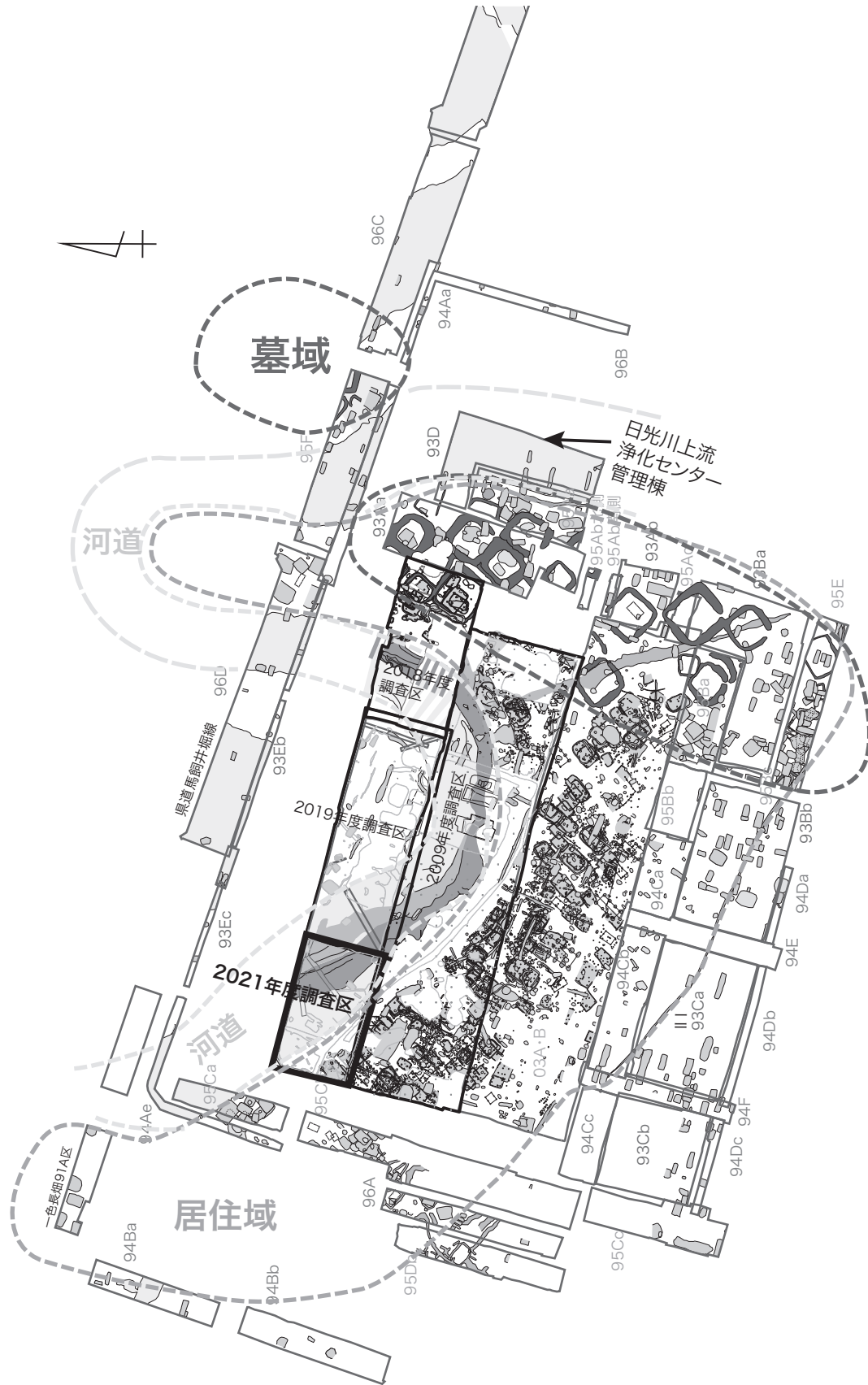
竪穴建物跡(066SI)出土遺物(南から)



大溝の完掘状況(手前の列左が200SD南岸、右は北岸)



T1土層断面



集落模式図(弥生時代中期後葉・S=1/2000)